

金華道情調査報告・その一

—二〇一二年三月・二〇一三年三月—

松 家 裕 子

はじめに

「道情」は中国で行われてきた、うた（「唱」）と語り（「説」または「講」）による芸能であり、また民間の口承文学の一ジャンルである。「道」の字は道教に由来するといわれ、もともと道教的な境地を詠んだり、道教の教化をするための文学であったが、南宋あるいは元のころから物語りをうたい語るものが出て、明代以降、大きく展開し、現在も中国各地で「道情」の名をもつ芸能が行われている^①。その地域は広く、山西省、河北省、山東省、河南省、陝西省、安徽省、湖北省、湖南省、江蘇省、浙江省、江西省、福建省、雲南省、貴州省、広西チワン族自治区、四川省、甘肅省、青海省、寧夏回族自治区、

内蒙古自治区、そして東北地区におよぶ^②。

ここに紹介する「金華道情」は道情の中でもよく知られるもののひとつで、二〇〇八年、国家の無形文化財（「非物質文化遺産」）。以下、「^①」は中国語の原語を示す）に指定されている。社会の急激な変化とともに、中国でも多くの口承文藝がすっかり姿を消した、あるいは消しつつあるが、金華道情は、今も中国の巷間で生きた姿を見ることができるといえる。

筆者は、この金華道情について、二〇一二年から二〇一五年にかけて、グループであるいは個人で、四回、七日間の現地調査を行なってきた。この文章は、そのうち前半二回、二〇一二年三月と二〇一三年三月の調査の報告である。

一連の調査は、わたしたち調査グループの実質上のリーダーである富山大学人文学部教授、磯部祐子先生が、金華という新しいフィールドを開拓されたことによって開始された。ここに報告する前半二回の調査も、磯部先生の手配によって実現したものである。磯部先生はすでに「金華道情の現状」を公表されている。これから報告する二回の調査への言及も含め、金華道情の現状を紹介されるとともに、短篇作品七篇の原文と翻訳を発表され

た。これはおそらく、金華道情のはじめての日本語訳であろう。⁽³⁾

浙江師範大学江南文化研究センター（「江南文化研究中心」）の黄霊庚先生と李聖華先生をはじめとし、同大学の先生方が、わたしたちの調査に大いに協力してくださいました。また現地調査は、黄先生がご紹介くださった金華市金東区文聯主席の張根芳先生の助力なしには成り立たなかった。報告をはじめるにあたり、まずこれらのみなさんに衷心よりの謝意を表したい。

一 金華道情について

金華は、浙江省の内陸、中西部にある中都市で、古名略称を「婺」という。山地に囲まれているが、古くから開けた交通の要衝で、三国時代、呉のときにこの地に東陽郡が置かれている。⁽⁴⁾ 南朝、梁のときには、六朝期を代表する文人、沈約が東陽太守となり、金華の代表的名勝八詠楼もこの沈約にちなむ。⁽⁶⁾ 現在、金華には中国鉄道の南部の大動脈のひとつがとおり、上海から長沙、さらに昆明を結んでいる。日中戦争のさいには、一九四三年、日本軍がこの地を侵略、占領した。現在は上海・虹橋駅から新幹線に乗れば、二時間で金華駅に到着する。金華

ハム（「金華火腿」）は中国文化圏で広く知られている。

また、近年では、金華地区に属する義烏が、日本の百円ショップで売られている類の安価な商品（「小商品」）の一大産地として、世界的な知名度をもつようになった。これらのことは、この地に外部の広い世界への指向が強くあることを示すだろう。金華の伝統地方劇「婺劇」は、道情にましてよく知られている。

先に述べたように、中国各地に「道情」の名をもつ語りもの芸能が残っている。張沢洪はこれらをまず、A北方、B南方の二系統に大別し、さらに北方系統の道情を、a語りものとしての道情、b影絵芝居の音楽としての道情、c演劇の音楽としての道情、と上演形態および地域によって三つに分け、南方系統の道情を、a湖北の道情、b四川の道情、c江蘇・浙江・江西・福建の道情、と地域によって三つに分類している。⁽⁷⁾ 金華道情はこのうち、B南方のc江蘇・浙江・江西・福建の道情、のひとつとされる。⁽⁸⁾

「金華」と言ったとき、「金華市」だけを指す場合と、さらに広く金華市、義烏市、衢州市などを含む「金華地区」を指す場合とがある。そのため、「金華道情」という呼称も、狭義と広義の両様がありうる。狭義で用いら

れた場合、金華道情以外に「義烏道情」「衢州道情」さらに「浦江道情」があることになる。広義の場合はこれらすべてが「金華道情」と総称されることになる。筆者は今のところ、狭義の金華道情を現地調査したにとどまり、この報告中の「金華道情」は狭義のそれである。

金華道情については歴代の地方志に記載がない。また、中国最大の論文検索ポータルサイトCNKI（中国知网）で、「金華道情」によって検索を行うと三十一件がヒットするが、そのほとんどは新聞・雑誌の記事の類である。目下、もっともまとまった情報を提供してくれるものとして、「浙江省非物质文化遗产代表作叢書」中の『「金華道情」一書がある。¹⁰⁾

二 調査の概要

これまで行なってきた調査の概要を、以下、時間順に示す。参考のため、次の機会に報告する後半二回の調査の概要も記しておく。

I 二〇一二年二月

調査者・磯部祐子先生（中国文学）、要木（藤田）佳美先生（島根大学非常勤講師・中国史・明清期江南地区）、松家裕子（中国文学）。

調査協力者・黄靈庚先生、李聖華先生、張根芳先生。

1 二月二十九日（水）・旧暦二月九日、午前
場所・張根芳先生自宅。

調査内容・① 金華道情全般に関する聞き取り調査。多数の資料も提供された。② 金華道情の実演（数分ほど）。謝文記さんによる。演目は短篇のみで、「十勸歌」のうちの「戒賭博」であった。

2 三月一日（木）・旧暦二月十日、夜

場所・金華旧城内、古子城地区にある地元料理のレストラン。

調査内容・顧客へのサービスとして上演されていた金華道情を鑑賞、録画、あわせて聞き取り調査を行った。上演は侯大祥（仮名）さんによる。演目は、短篇で、黄初平のトンち話のひとつであった。

II 二〇一三年三月

調査者・磯部祐子先生、松家裕子。

調査協力者・黄靈庚先生、李聖華先生、張根芳先生、金華市金東区曲芸協会主席・盛根旺さん。

1 三月二十五日（月）・旧暦二月十四日、午前
場所・金華郊外、曹宅鎮、北麓書院。
調査内容・公的資金によって住民のために行われている

た金華道情を鑑賞、録画、あわせて短い聞き取り調査を行った。上演は傅さん（名は記さない）による。

演目は長篇「文武香球」（一部）であった。

Ⅲ 二〇一五年八月

調査者・松家裕子。

調査協力者・張根芳先生、金華市澧浦鎮文化站主任・

黄艶笑さん、金華道情国家認定伝承者・朱順根さんとその夫人朱必蓮さん。

1 八月二十七日（木）・旧曆七月十四日、午前

場所・金華郊外、澧浦鎮、積道書場、および朱順根さん自宅。

調査内容・公的資金によって住民のために行われていた金華道情を鑑賞、録画、あわせて聞きとり調査を行った。上演は朱順根さんによる。演目は、短篇が包拯と牛盗人の話、長篇の本篇が「天宝物」（一部）であった。

2 八月二十八日（金）・旧曆七月十五日、中元節、午前・午後

場所・金華郊外、澧浦鎮、積道書場、および朱順根さん自宅。

調査内容・調査のための上演を朱順根さんに依頼し、

これを鑑賞、録画、あわせて聞き取り調査を行った。演目は長篇「尼姑記」（全篇）であった。

Ⅳ 二〇一五年十一月

調査者・小南一郎先生（泉屋博物館館長・中国文化史）、松家裕子。

調査協力者・張根芳先生、黄艶笑さん、朱順根さん、

朱必蓮さん。

1 十一月二日（月）・旧曆九月二十一日、午前・午後

場所・金華郊外、澧浦鎮、積道書場、および朱順根さん自宅。

調査内容・公的資金によって住民のために行われていた金華道情を鑑賞、録画、あわせて聞きとり調査を行った。上演は朱順根さんによる。演目は、短篇が貧しいが善良な嫁の話、長篇が「天宝物」（一部）であった。

2 十一月三日（火）・旧曆九月二十二日、午前・午後

場所・金華郊外、澧浦鎮、積道書場、および朱順根さん自宅。

調査内容・調査のための上演を朱順根さんに依頼し、これを鑑賞、録画、あわせて聞き取り調査を行った。演目は、短篇が「夫婦通信」「張百屁買小猪」、長篇

が「皇涼傘」(二部)であった。

三 二〇一二年二月の調査

二〇一二年二月二十八日(火)、筆者は始めて金華を訪れた。浙江師範大学内の宿舎に着いてすぐ、黄靈庚先生、李聖華先生をはじめとする浙江師範大学の先生方にお目にかかった。浙江省の省庁所在地(「省会」)は杭州だが、浙江師範大学は金華にある。浙江師範大学には江南文化研究センターがあり、黄先生も李先生もその研究にたずさわっておられる。わたしたちの調査もこのセンターに関連づけられたのであった。しかし、おふたりの専門は金華道情ではない。黄先生は楚辞の著名な研究者であり、李先生は明清の詩文の研究者である。現在知るかぎり、中国の大学で金華道情を専門に研究している人はいないようだ。

1 二月二十九日(水)・張根芳先生宅

翌二十九日朝、浙江師範大学の若い教員である蔣先生の案内で、張根芳先生を自宅に訪ねた。張先生は、はじめ、民間伝承の調査のために以前金華を訪れた三人の日本の女性研究者のことを、ひとしきり話された。金華の

曹宅鎮に曹松葉(一八九七—一九八七)という人がおり、この人が現地の民間伝承を五百あまり集めた。縁あって、曹松葉はこれをドイツのエバーハルトに託した。エバーハルトはこれを主要な資料として、中国の民間伝承の話を整理し、『中国民間故事類型』を作成した。三人の女性が金華を訪れたのは、これに関連する調査を行うためであった。この三人の話をされたのは、わたしたち三人が日本からきた女性だったからだけではなく、張先生が彼女たちの情熱に動かされ、それが仕事の原動力のひとつになったからのものであった。

そのあと、金華道情の概略を説明してくださった⁽¹²⁾。金華道情は、古くは「唱新聞(ニュースうたい)」とも呼ばれた。物乞いの文学(「乞丐文学」)であり、芸能者には視覚障害者が多かった。子どもに視覚障害があると、親は、生きてゆく手段を与えるために、道情を学ばせたのだという。道情は茶館や個人宅で行われた。茶館は、茶菓および芸能などを供する大きな喫茶店のようなもので、往時、民間の重要な社交の場であった。人々はまた、祝いごとがあると、金華道情の芸能者を自宅に招いた。上演にあたっては、まず「枕」として短篇(「攤頭」)がうたわれる。短篇には尾籠な話・性的な内容をもつ話

〔葦故事〕もある。その後、長篇の本篇がうたわれる。長篇には十数晩かかる演目もある。¹²⁾

張先生は、一九五四年のお生まれである。十一年間教師を務め、その後、文化行政の拠点（「文化站」）に職場を転じられた。そのときから、民間の文学に関心をもつようになられたという。張先生が主席を務める文聯は、文化方面の組織を統括するが、そのひとつに「曲芸家協会」がある。「曲芸」は中国語ではうたと語りによる芸能を指す。金華市金東区曲芸家協会主席、盛根旺さんは自身が道情の芸能者で、朱順根さんのお弟子さんである。この盛根旺さんが、朱順根さんのうたう道情「双珠花」を文字に起こされた。張先生がこれを整理して出版された。張先生は、同様にして、金華道情の長篇「黄涼傘」「双玉球」および多くの短篇を整理し、三冊の道情集を刊行されている。¹³⁾

金華道情は視覚障碍のある人々を主たる担い手とし、しかも即興性がかなり高い。よって伝承されてきたテキストは皆無で、またこれを文字に起こすことも非常に困難である。そのような中で行われた、張先生と盛根旺先生のお仕事は、とても貴重なものである。

張先生が金華道情のテキストを整理、刊行されたのは、

金華の方言を記録したいという強い思いがあったからだという。方言の趨勢は失われていく方へ向かっている。

方言の研究者は発音の正確さを第一に考えて、当てる漢字を決める。しかし、道情をこの方法で記録すると、他の地域の人たちにも、後世の人にも理解されず、よって継承もされない。張先生はこういう、読んでわかる文学にすることを旨としている、と、何度も強調された。たとえば、金華方言の「わたしたち」を、張先生ははじめ「阿浪」と記されていた。しかし、現在は「俺浪」と書かれている。これならば、漢字を見ただけで、一人称の代名詞であることがわかるからである。

お話をうかがううちに、わたしは金華道情がとても聴きたくなり、張先生に、ぜひうたっていたきたいとお願ひした。今から考えれば見当はずれなことをしたものである。張先生は無下には断られなかったものの、うたわれることはなく、盛根旺先生の弟子である、謝文記さんと呼んでくださった。謝さんは一九六〇年生まれ、本業は自動車教習所の先生である。駆けつけた謝さんは、専用のきらびやかな上着をつけ、腰をおろすと、右手で漁鼓を、左手で簡板を、打ちならし始められた。漁鼓は情筒とも呼ばれ、長い竹筒の一方の底に皮を張った道情

を象徴する楽器である。簡枝は二枚の長い竹の板である。そうして謝さんは、

「十の忠告（「十勸歌」）のうちから、

「賭博のいましめ（「戒賭博」）」をう

たってくださった（写真1）。

短い実演のあと、

張先生は、金華道情のみならず、婺劇な

ど金華に関する多くの資料を、紹介あるいは提供してくださった。張先生はまたこう言われた。街で気をつけてみるといい。金華ではごく普通の人も、みな標準中国語（「普通話」）を話すことができる、と。果たしてそのとおりであった。これは金華の風土にかかわる重要なことからであったし、また、わたしたち外来の調査者にとっては大へんありがたい情報であった。



写真1

2 三月一日（木）・地元料理のレストラン

— 商業的上演 —

二月二十八日の午後から翌日二月二十九日にかけて、李聖華先生の案内で、遂昌まで一泊で出かけ、村芝居としての婺劇の上演を調査した⁽¹⁵⁾。翌三月一日は、金華市街の城隍廟内に金華市芸術研究所を訪ね、所長の包升華先生から、婺劇に関連する多くの資料の提供を受けた。また、市内見学として金華の旧城内、古子城地区を散策した。そのとき、同地区のレストランで、道情の上演があることを知り、夜、この店に出かけた。

店に入ると道情の演じ手が、右手に漁鼓、左手に簡板という定番のスタイルで、店内奥中央の高いところに坐っている。椅子が、床ではなく、正方形のテーブル（「八仙卓」）の上に置かれているのでとても高く見える。演じ手は真赤な長衣を身につけ、八仙卓にも「金玉满堂」の文字の入った赤い布が掛けられて、いかにも華やかな印象である（写真2）。

この日の演じ手は侯大祥さん（仮名）。道情の内容を、あとで侯さんにかがったところ、標準語で以下のとおり説明してくださった。

これは、黄初平のお話である。黄初平は黄大賢（黄大仙）とも呼ばれ、金華から出て東南アジアで成功した、有名な人物である。

さて、ある金持ちの家があり、銭作成という五十六歳の知識人がそこで家庭教師をしていた。一年の仕事の報酬として二十両をもらい、二仙橋のところにやってきた。この橋の西に、たいそうはやる大きな茶館があり、そこに、とんち話を人に語って金を稼ぐ「とんち屋（満話（漫話）先生）」がいた。ここに先の家庭教師がとおりかかり、とんちくらべをすることになった。とんち屋がいった。「お店のまえの柳の木、葉っぱは全部で一万枚、俺の手下は八人で、みんな毎日勘定したぞ」。家庭教師はことばに詰まってきりかえせず、敗北した。二十両を失った家庭教師は、山をこえたところのあずまや（涼亭）で首を吊った。

さて、鐘頭村に黄九丐という男がいた。代々乞食の家で、初代から数えて九代目なのでこの名があった。黄九丐にはふたりの息子がいた。長男の黄初起は十五歳で薪取りを生業とし、次男の黄初平は十三歳で学問をしていた。年の瀬、旧暦の十二月二十八日、黄九丐

は正月の準備のために、黄初平に米や肉を買ってくるようお願い、十両を渡した。黄初平が歩いていると、鳥が一丈先んじて飛び、嘴で黄初平に合図をする。ついていくと、あずまやで人が首を吊っていた。黄初平は急ぎこれを助け、事情を尋ねた。家庭教師は、そこで、この一部始終を話した。

候さんは、道情がここまで来ると、いちど休憩をされた。このときにも聞き取りを行なったが、その内容はあ



写真2

とにまとめて紹介する。小休止ののち、黄初平の話を再開するまえに、短篇の「八仙づくし」と「名山づくし」を、標準語でうたわれた。標準語は我々にたいするころ配りだったのだと思われる。以下、話のつづきである。

さて、話をきいた黄初平は、二十両を取り返そうと、とんち屋に勝負を挑んだ。とんち屋は、黄初平が子どもだからと相手にしない。黄初平が十両を出し、自分を負かしたらこれが手に入るぞ、とそそのかすと、とんち屋はやつと応じた。黄初平は自分からやらせてくれ、とこういった。「おまえの頭を斬って測れば、めかたはきつと五キロ（十斤）だな。肉を斬る場所見つけてきたぞ、さあさ頭を斬ってくれ」。とんち屋は「負けた」と、二十両を黄初平に返した。

このあとさらに、黄初平のうわさを聞いて、挑戦しに来た科挙受験生（「秀才」）が、黄初平に負かされる話がつづいたが、詳細がわからなかった。金華道情は、とんち話、ことばの遊びを含む話が多いことを特徴のひとつとする。黄初平の話は、これ以外にもたくさんあるという。

さらにひとつ、侯さんから聞いた話がある。道情として行われたのではなく、聞き取りのさいに話された。性的な内容を含む話であり、しかもひとつの職業をひどくさげすむものでもあるが、芸能者の置かれていた状況や心情をよく示すものであると考えられるので、ここに紹介する。

芝居の役者のことをかつては「戲子」といった。その由来の話である。ある男が十六歳で父を亡くした。旧暦六月（新暦七月八月）の炎天下、母親が湯をつかっていた。男はこれを見てしまい、病気になった。どんな薬を飲ませても、どの医者に診てもらっても治らなかつた。母は困って男に問うた。いったいどうして病気になったのか、と。男はどうとうほんとうのことを母に話した。母と男が結ばれて、男は元気をとりもどした。その後、男は芝居の一座に送られた。そこで、役者のことを「戲子」、つまり息子と戯れるというのだ。

自分の母親と関係をもつというのは、中国でもっとも人を愚弄するときに用いられる話柄である。侯さんはこの話をするまえにいわれた。今はスター（「明星」）、ス

ターと騒がれているが、役者はむかしはいちばん軽蔑されていたものだ、と。この話は、語りものの芸能者たちにとって、演劇の役者たちが手強い商売敵であったことを反映し、弱い立場にあった人々の鬱屈した心情を表すと推測される。

営業中であつたとはいえ、上演の合間に、侯さんからわりあい長くお話をうかがうことができた。

侯さんは代々道情をうたつてきた家に生まれた。自分も含めて、視覚障害のある人はいない。数え八歳から父親について道情を始めた。父親は清朝末年（一九一一年）の生まれである。家はもともと仙橋鎮にあつたが、のち豊浦鎮に移った。二〇〇八年一月、北京へ行って、「中国俱樂部」で十万人をまえに道情をうたつたこともある。この店で演じはじめて五年になる。一日八十元をもらうのだが、この仕事がいやでしかたがない（「煩死了」）。語りものの芸人など悲しいものだ（「悲哀」）。別の土地の人たちにわかつてもらうことができない。行ける土地はせいぜい蘭溪、武義、義烏、東陽の四か所だけだ。浦江でももうことが通じない。

後のことになるが、侯さんは金東区曲芸家協会に所属していたが、規律を乱す言動が多く、除名されたという

話を人から聞いた。金華道情は、現在政府から保護を受けている。侯さんほどの技をもつ人が、私営のレストランで上演するには、それだけの理由があつたのである。侯さんのいう「悲哀」は、このことに発するのだろう。

「戲子」の由来譚も、あるいは侯さんの現在の境遇から導き出されたものだったのかもしれない。侯さんとの出会によって、わたしたちは、かつて茶館で金華道情が演じられていたときの上演のありさまを知ることができた。それと同時に、往時の芸能者たちが抱いていた心情を、うかがうこともできたように思う。しかし、この収穫は決して喜ばしいものではなかった。

四 二〇一三年三月の調査

このときは金華に滞在した時間が短く、また婺劇の調査も行なつたため、金華道情については一か所で短時間の調査をするに留まった。

二〇一三年三月二十五日（月）、朝九時に宿舍である海逸大酒店を車で出発し、張根芳先生の案内で、金華市街地から東に二十キロの曹宅鎮へ向かった。ちなみに、海逸大酒店は、浙江師範大学の南、駱家塘、暢達街にある。詩人として知られる初唐の人、駱賓王（六四〇？—

六八四?)がこの地にいたと伝えられている。この日は旧暦二月十四日であった。曹宅鎮では旧暦の一、四、七の日に市が立つ。この日も鎮の中心はにぎわっていた。金華郊外の農村では、このように旧暦の日付にしたがって、十日のうち三日、市が開かれている。張根芳先生によれば、現在、金華では、この曹宅鎮・北麓書院のほか、孝順鎮・荷風書社、そして後半二回の調査地点である澧浦鎮・積道書場で、市の立つ日に道情が行われているという。

曹宅鎮に着いて車を降りると、タイムトンネルをくぐったような風情であった。古いたたずまいの家々には、木材が豊富に使われている。木材産業や木工業は、金華地区の主要な産業のひとつで、金華の農業でも苗木の生産が大きな位置を占めている。

上演場所である北麓書院に着くと、入り口右に「北麓書院」、左に「金東区曹宅鎮文化活動中心」の看板がそれぞれ見える。北麓書院は字び舎を思わせる名で、道情の上演場所にそぐわない。張先生は、「書苑」とすべきところ、字を誤ったのであろうといわれた。中に入ると、盛根旺さんが迎えてくださった。大きめの教室のような場所(写真3)で、道情が上演されていた。五十代以上

と思われる男女が五十人ほど、静かに道情に耳を傾けている。道情の上演はたいい朝八時から行われる。わたしたちが到着したのは九時半ごろであったから、二時間のうち最後の半時間だけ鑑賞、撮影したことになる。

会場の前方、舞台の向って左側の黒板に、こう書かれていた。

説新聞

正本道情《文武香球》

説唱 傳××

ニュース語り、長篇本篇は『文武香球』、演じ手は傳さん(黒板には名が記されていたが、ここでは省略する)である。椅子に座り、右手で漁鼓をうち、左肘で漁鼓の上部を支え、左手で二枚の簡板を打ちならす。金華道情のいつものスタイルである。これまで接したふたりの演じ手とちがったのは、衣装が地味だったこと、そして傳さんが目に障害を持っておられたことである。古来、世界中の盲目のことはの使い手たちが、文学の創造に大きな役わりを担ってきた。しかし、その創造のしくみも創造者たち自身のこともよくわからない。それは中国も



写真3

例外ではない。その末裔、あるいは当事者のひとりをもえにしているのだ。上演終了後、傳さんにお話をうかがいたいと強く思ったが、事前の約束をしていなかったため、記念撮影をしていただき、二言三言交わしただけに終わった。

盲目の芸能者とともに注意をひかれたのは沈黙の聴衆である。聴衆が、上演中、とても静かに集中して、道情に耳を傾けていた。これまで接した他の芸能とくらべ、その度合いは群を抜いていた。

おわりに

調査の内容からすると、以上二回の調査はむしろ前置きで、二〇一五年の朱順根さんの調査が本篇になる。よってここできなにか結論のようなことを述べることはせず、現在の関心のありかを示して、この文章のまとめに代えたいと思う。

筆者は、ずっと文学と信仰とのかかわりに強い関心を抱いてきた。だから、はじめ金華道情に接したとき、拍子抜けしてしまった。道教とのかかわりを期待していたのに、その片鱗すらみえず、テキストの内容が、徹頭徹尾、世俗的だったからである。しかし、金華道情は、そ

の軽い失望を補って余りある、興味深い点がたくさんあることがわかってきた。ここに報告した二回の調査に収まりきらない内容も含むが、それを、挙げてみたい。

一 主として視覚に障碍をもつ人々によって行なわれてきたこと。

二 かなりの頻度と程度で性的な表現が行なわれてきたようであること。

三 押韻が必須の条件とはなっていないこと。

四 テキストが、小説・戯曲はもちろん、他の口承文藝とくらべても、かなり独特であるという印象を与えること。とりわけ心理描写に長けているようであること。⁽¹⁾

二・四は、『金瓶梅話』の成立について、なんらかのヒントを得られるかもしれないという期待につながる。しかし、そうした個別の作品の問題だけではない。上記の四点は、もっぱら文字によって理解されてきた「中国文学」や「中国文化」で見えなくされてきたことと、深くかかわっている。したがって、それが可視化されれば、中国文学を、世界文学の中で、しかもその特殊性に焦点を当ててではなく、普遍性から論じるためのなにかを見出すことができるかもしれない。次の後半二回の調査

報告では、テキストの分析もあわせ、そのための試みを行いたいと考えている。

注

(1) 中国の道情全般については、澤田瑞穂「道情について」『中國文學』第四十四号、一九三八年所収、澤田瑞穂「道情考補遺」『天理大学学報』第二十二号、一九七〇年九月所収、波多野太郎「道情彈詞木魚書——中国文学史研究——」(上)(中)(下)『横浜市立大学論叢』人文学部系列、第二十一卷二号・三号、第二十二卷一号、同二号・三号、一九七〇年三月、同十二月、一九七一年三月所収、および張沢洪「道教唱道情与中国民間文化研究」人民出版社、二〇一一年参照。

(2) 張沢洪前掲書、第七章 中国北方的皮影戲曲道情、二七三頁。

(3) 磯部祐子「金華道情の現状」『中国江南唱導文藝研究——上演・テキスト・信仰——』平成二十三年度～二十五年科学費研究費・基盤研究(C)、課題番号23520445、報告書、二〇一四年三月所収。

(4) 『中華人民共和国地名詞典・浙江省』商務印書館、一九八八年、二二三～二四八頁参照。

(5) 『梁書』卷十三・沈約伝。

(6) 『中国名勝詞典』上海辞書出版社、一九八六年、浙江省、金華市「八詠楼」、四〇九頁。

(7) 張沢洪前掲書、第七章 中国北方的皮影戲曲道情、

二七三～三三四頁、および 第八章 中国南方的詩賛体道情、三三五～三八一頁。

- (8) 張沢洪前掲書、第八章 中国南方的詩賛体道情、第二節 江蘇、浙江、福建的唱道情、二、浙江道情的演唱、三五四～三六二頁。

- (9) 簡便な方法であるが、雕龍シリーズの検索による。

このシリーズに収録されている金華とその周辺地区の地方志は以下のとおりである。万曆金華府誌、康熙金華府志、光緒金華県志、康熙湯谿県志、民国湯谿県志、万曆蘭谿県志、嘉慶蘭谿県志、嘉靖武義県志、嘉慶武義県志、光緒宣平県志、乾隆宣平県志、民国宣平県志、正徳永康県志、光緒永康県志、康熙永康県志、道光東陽県志、崇禎義烏県志、嘉慶義烏県志、嘉靖浦江志略、光緒浦江県志、以上計二十種。

- (10) 章曉華・呉瑯雲・章竹林編著『金華道情』浙江攝影出版社、浙江省非物質文化遺産代表作叢書、二〇一四年。
- (11) 曹松葉については、黄子奇『曹松葉民間文学民俗研究作品集』北方文艺出版社、二〇〇四年参照。

- (12) ここには聞き取り調査で得られた情報のみを記す。

詳細は章曉華ほか前掲書参照。

- (13) 後半二回の調査から、一年がかりで行われる道情もあることがわかつている。

- (14) ①張根芳主編『金華道情 双珠花』文化芸術出版社、二〇〇八年。②張根芳主編『皇涼傘・双玉球』文化芸術出版社、二〇〇八年。③金華市金東区政協文史資料委員会編『金華道情攤頭集』（金華市金東区政協文史

資料第十一輯）、二〇一二年。

- (15) なお、この時のわたしたちの調査については、章曉華ほか前掲書中「金華道情、義烏道情大事記」一七八頁に、磯部祐子先生の名を挙げて、大事の一つとして記録されている。

- (16) この調査については、松家裕子「婺劇観劇記」二〇一二年二月、浙江省遂昌―『アジア観光学年報』第十四号、二〇一三年三月に報告した。

- (17) 章曉華ほか前掲書中「文学的価値（文学価値）」部分、五十五～六十頁もこれについて言及している。

この報告は、「中国江南唱導文藝研究 ―上演・テキスト・信仰―」（平成二十三年度～二十五年度科学研究費・基盤研究（C）、課題番号23520445、研究代表者：松家裕子）および「浙江金華口承文藝研究 ―語りもの藝能「金華道情」を中心に―」（平成二十六～二十八年度科学研究費・基盤研究（C）、課題番号26370418、研究代表者：松家裕子）の成果の一部である。